教皇フランシスコ『ラウダート・シ』におけるインテグラル・エコロジーと戦争

角田佑一

はじめに

本稿の主題は、教皇フランシスコの回勅『ラウダート・シ』におけるインテグラル・エコロジーと戦争との関係について解明することである。本稿の構成は以下のとおりである。

まず、「一、インテグラル・エコロジーとは何か」においては、インテグラル・エコロジーがいかなる要素によって構成されているのかを明らかにしている。「二、『ラウダート・シ』における戦争に関する言明」の中では、『ラウダート・シ』において語られるインテグラル・エコロジーと戦争との関係について解明している。「三、エコロジカルな教育とエコロジカルな霊性」では、インテグラル・エコロジーを実現するために、私たちがどのような生き方をして、いかなる世界観を持つべきなのかを明らかにしている。「結語」では、本論で述べた内容をまとめて、『ラウダート・シ』におけるインテグラル・エコロジーと戦争との関係を解明している。

インテグラル・エコロジーとは何か

環境的、経済的、社会的なエコロジー

教皇フランシスコは回勅『ラウダート・シ』の中で、現代世界においてインテグラル・エコロジーを推進すべきであると述べる。インテグラル・エコロジーとは、「環境的、

経済的、社会的なエコロジー」、「文化的なエコロジー」、「日常生活のエコロジー」という要素によって構成される総合的なエコロジーである。本章では、『ラウダート・シ』におけるインテグラル・エコロジーとは一体何なのかを明らかにする。そして、本節ではインテグラル・エコロジーの中の「環境的、経済的、社会的なエコロジー」について説明する。

教皇フランシスコによれば、エコロジーとは「生命体とその生育環境とのかかわりの研究」である。この研究は「社会の存在と存続に必要な諸条件に関する考察と討議」、「開発と生産と消費の特定のモデル」を問い直すために必要な正直さを伴っている。地球における物理的、化学的、生物学的な多くの側面が互いに関係しあっているとともに、生物種も「探り尽くされたり知り尽くされたりすることは決してないネットワークの一部」である（『ラウダート・シ』138）。[1] 人間の遺伝情報の多くは、多くの生物と共有されているように、「知識の断片化や情報の細分化」が、「現実に対するより広範な展望」に向って統合されないなら、現実には「一種の無知」に陥る（同上138）。[2]

教皇フランシスコによれば、「環境」について考える際に私たちが言おうとしていることは、自然と自然の中で営まれている社会との関係である（同上139）。[3] 私たち人間は自然を自分たちとは一切関係のないもの、人間の生活の「単なる背景」とみなすことはできない（同上139）。[4] それゆえ、エコロジーの問題を考えるためには、「さまざまな自然システム間の相互作用および社会の諸システムとの相互作用を考慮した、包括的解決の探求」が必要である。私たち人間は「環境危機と社会危機という別個の二つの危機」に直面しているのではなく、「社会的でも環境的でもある一つの複雑な危機」に直面している。それゆえ、この危機を解決するためには、「貧困との闘いと排除されている人々の尊厳の回復」と「自然保護」とを統合したアプローチが必要である、と教皇フランシスコは述べる（同上139）。[5]

教皇フランシスコによれば、具体的な事業を始める際

の環境影響を調べる研究をすると、異なった被造物が互いにどのように関係しあって、「生態系」（エコシステム）を形成しているのか、よりよく理解することが可能になる（同上140）。[6]「生態系」（エコシステム）について考慮するのは、生態系に属する被造物をいかに人間が利用するのかを知るためではなく、それらの被造物が人間にとっての有用性とは別の「内在価値」を持っているためである。「一つ一つの有機体」、「一定の空間に存在し一つのシステムとして機能している調和の取れた有機体の集合」は、神の被造物として「それ自体で善なるもの、感嘆すべきもの」であると教皇フランシスコは述べる（同上140）。[7]実際に「二酸化炭素の吸収、水の浄化、疾病や流行性感染症の制御、土壌の形成、廃棄物の分解」において、さまざまな生態系が互いに作用しあっている。そして、私たち人間はそのような生態系の相互作用のシステムに支えられて生きている。それゆえ、私たちが「持続可能な利用」について語るとき、「各生態系の再生能力」を考慮しなければならない（同上140）と教皇フランシスコは考える。[8]

文化的なエコロジー

本節では、インテグラル・エコロジーの中の「文化的なエコロジー」について説明する。教皇フランシスコによれば、現代社会においては「自然という遺産」だけではなく、「歴史的、芸術的、文化的な遺産」も脅威にさらされている。このような遺産はそれぞれの場所で共有されているアイデンティティの一部分である（同上143）。[9]環境に優しい都市を造るとき、「それぞれの場所の歴史、文化、建造物」を取り入れて、「その場所固有のアイデンティティ」を維持する必要がある。それゆえ、エコロジーは「人類の文化財の保護」に積極的に関与すると教皇フランシスコは言明している（同上143）。[10]エコロジーは、環境問題の研究において、「専門的な科学言語と民衆の言語との対話」を大切にし、地域文化により大きな配慮を示すように求める。人間の文化とは「過去からの継承以上のもの」であり、人間と環境との関わりを再考するためには外すことのできな

いものであると教皇フランシスコは述べる（同上 143）。[11]

教皇フランシスコによれば、「人間がもつ消費主義的な考え方」は、現代の「地球規模化した経済機構」によって助長され、「諸文化の均一化」を促進し、結果として「全人類の相続財産であるはかりしれない多様性」を損ねてしまう（同上 144）。[12] そして、地域共同体のあらゆる問題を外部から「画一的な規制や技術的介入」によって解決しようとする試みは、その共同体の人々の積極的な参加を必要とする「地域の問題の複雑さ」を看過させてしまう（同上 144）。[13] 地域共同体が自らの抱える問題を解決して、自分自身で発展していくためには、その地域の文化を基礎としなければならず、「民族や文化の諸権利を尊重し、歴史的過程なくして社会集団の発展はありえない」ことを理解しなければならない。この歴史的過程は、文化的文脈の中で進行し、「地域住民に固有な文化の内部からの継続的で積極的な参加」を求める。それぞれの地域の人々の「生活の質」も、「人間集団それぞれに固有の象徴と習俗の世界の内部」から理解されなければならないと教皇フランシスコは述べる（同上 144）。[14] 自然破壊によって環境を酷使し、悪化させることは、地域共同体の生活を支える資源を枯渇させるだけではなく、長い間、文化的アイデンティティを養い、生きることと共に暮らすことの意味へのセンスを育てて来た社会構造を破壊してしまう。一つの文化の消失は、植物や動物の一生物種の消失と同じように深刻であると教皇フランシスコは考える（同上 145）。[15]

日常生活のエコロジー

本節では、インテグラル・エコロジーの中の「日常生活のエコロジー」について説明する。教皇フランシスコによれば、人間社会の真の発展は、「生活の質の全人的改善をもたらす取り組み」を含んでおり、「人々の生活条件」を考慮しなければ実現しえないものである。そのような生活条件は私たちの思考、感情、行動のあり方に影響を与える。もし、その環境が乱雑で無秩序なものであり、騒音と醜悪さに満ちたものであるならば、私たちは充足感や幸福

感を見出すことができなくなる（同上147）。[16] しかし、環境上の制約や困難があっても、貧しい人々が実践するヒューマン・エコロジーがある。共同体の中で人々が親しく交わり、「連帯と帰属のネットワーク」に支えられていると一人ひとりが感じ、環境上の制約が埋め合わせられるならば、どのような場所も、「地上の地獄」から「尊厳ある生の舞台」に転換しうると教皇フランシスコは述べる（同上148）。[17]

教皇フランシスコによれば、ヒューマン・エコロジーの本質として、私たち人間は自分たちの身体によって、自然環境との関わり、他の生き物たちの関わりに置かれている。私たちが自分たちの身体を神からの贈り物として受け入れることは、「全世界を、御父からの贈り物として、また、わたしたち皆がともに暮らす家として、迎え入れまた受け取るためにきわめて重要なこと」である。私たちが「自分の身体に対して絶対権力を有していると思いなすこと」は、「被造界に対して絶対権力を有していると思いなすこと」につながると教皇フランシスコは述べる（同上155）。[18] 以上のように、教皇フランシスコはインテグラル・エコロジーを構成する「環境的、経済的、社会的なエコロジー」、「文化的なエコロジー」、「日常生活のエコロジー」の内容を説明している。

共通善の原理

教皇フランシスコによれば、インテグラル・エコロジーは、共通善と不可分である。共通善とは「集団と個々の成員とが、より豊かに、より容易に自己完成を達成できるような社会生活の諸条件の総体」を意味する（同上156）。[19] 共通善を考える場合、全人的発展に向けて基本的諸権利を賦与された人格として、一人ひとりの人間を尊重することが共通善の原理の前提となる（同上157）。[20] 共通善を実現するためには、補完性の原理を適用して、さまざまな「中間集団」の発展が重要である。この「中間集団」の代表が「社会の基本細胞」としての「家族」である（同上157）。[21] 教皇フランシスコによれば、「共通善の要求」は社会的平

和や「何らかの秩序がもたらす安定や安心」である。これらを実現するためには、配分的正義への配慮が重要である。もしも、配分的正義が損なわれるならば、その後にはいつも暴力がやって来る。そのため、「一つの全体としての社会」、とりわけ国家は「共通善を保護し促進する義務」を負っていると教皇フランシスコは述べる（同上157）[22]。

さらに教皇フランシスコによれば、共通善は世代間正義をも含んでいる。環境はあらゆる世代に貸し付けられているものであり、いずれは次の世代に手渡さなければならない（同上159）[23]。私たちが次の世代の人々に、どのような世界を残そうとするのかを考えるとき、私たちがこの世界で何のために生きるのか、なぜここにいるのか、私たちの活動とあらゆる取り組みの目標が何なのか、私たちが地球から何を望まれているのかを問わなければならない（同上160）[24]と、教皇フランシスコは述べる。そして、たんに将来の世代の人々のことを考慮すべきであると言うだけではなく、現代に生きる私たちの尊厳が危機にさらされていると理解すべきであり、「生息可能な惑星」を将来の世代に残すことは、現代の私たちにかかっているのであり、現代の私たちの「地上での滞在の究極的意味」と関係していると教皇フランシスコは考える（同上160）[25]。

以上のように教皇フランシスコは『ラウダート・シ』におけるインテグラル・エコロジーの内容を明らかにしている。さらに教皇はアシジの聖フランシスコが、インテグラル・エコロジーの最高の模範であったと述べる。アシジの聖フランシスコは、「被造物と、貧しい人や見捨てられた人」への愛に生き、すべてのものに開かれた心を持ち、「神と、他者と、自然と、自分自身との見事な調和のうちに生きた神秘家であり巡礼者」であった。そして、彼は「自然への思いやり」、「貧しい人々のための正義」、「社会への積極的関与」、「内的平和」の結びつきが分かちがたいものであることを示した（同上10）[26]。このようなアシジの聖フランシスコの生き方へと教皇は私たちを招いている。

『ラウダート・シ』における戦争に関する言明

調和の破壊としての戦争

教皇フランシスコは、『ラウダート・シ』の中で戦争について以下のように述べている。創世記における創造物語を見ると、神との関わり、隣人との関わり、大地との関わりによって、人間の生命が成り立っていることが分かる。しかし、人間の生命にかかわるこの三つの関わりは、外面的にも、内的にも引き裂かれてしまった。この断裂が罪であり、人間が神に取って代わり、被造物としての限界を認めるのを拒んで、「創造主と人類と全被造界の間の調和」が壊されてしまった（同上66）[27]。アシジの聖フランシスコが神とすべての被造物との関係の中で経験した調和は、そのような「断裂のいやし」として受け止められた。教皇フランシスコによれば、アシジの聖フランシスコが「あらゆる被造物との普遍的な和解」を成し遂げたとき、「原初の無垢な状態」に戻ったとフランシスコ会の神学者ボナヴェントゥラは理解した。そして、「戦争、種々の暴力や虐待、もっとも脆弱な者の放置、自然への攻撃」など、「罪の破壊力のすべてが露わになっている」現代の状況は、神と全被造物との調和に反するものである（同上66）[28]。このように教皇フランシスコは、戦争が三つの次元の調和、すなわち神と人間との関係における調和、人間同士の関係における調和、人間と他の被造物との関係における調和を破壊するものであると考えている。

さらに教皇フランシスコは『ラウダート・シ』において、もしも、私たち人間の心が「天地万物との交わり」に開かれているなら、このような「友愛の感覚」はどのような被造物をも排除しない。地上の被造物に対する無関心や残虐行為は、他の人間への接し方にも影響を及ぼすものである（同上92）[29]。教皇フランシスコによれば、「いかなる被造物に対するいかなる残虐行為」も「人間の品位に反する」ものであり、「平和、正義、被造界の保全」は相互に関係しあった三つのテーマである。私たち人間は、「被造物一つひとつに向けられる神の愛」によって結び合わされ、「驚

きに満ちた巡礼をともにする、兄弟姉妹」として呼び集められている。この愛は「兄弟なる太陽、姉妹なる月、兄弟なる川、母なる大地への柔和な情愛」によって、私たちを一つにするという（同上92）。[30] ここで教皇フランシスコは人間が人間以外の他の被造物（動物・植物など）に対して残虐な行為を行うならば、それはおのずと他の人間との関わり方へと影響を及ぼすと述べる。そして、そのような行為は、最終的に人間に対する残虐な破壊行為につながることをも暗示している。

教皇フランシスコは『ラウダート・シ』の中で、テクノロジーの発展に伴う現代の戦争について、自らの見解を以下のように述べる。私たち人間は「核エネルギー、バイオテクノロジー、インフォメーションテクノロジー、人間のＤＮＡに関する知識、また、獲得してきた他の多くの能力」によって、「絶大な権力」を手に入れた。そして、そのような技術や能力についての知識、それらを用いる経済力のある人々に、「人類全体と全世界に及ぶ強大な支配権」を与えてきた（同上104）。[31] このような絶大な権力が賢明に行使される保証はどこにもなく、二十世紀において「核爆弾、ナチズムや共産主義やその他の全体主義体制による何百万人もの殺戮」に数多くのテクノロジーが用いられたことを思い起こすと、現代の戦争では「これまで以上に破壊的な兵器」が用いられる可能性がある（同上104）。[32] 教皇フランシスコによれば、自然資源が枯渇してしまうと、新たな戦争を引き起こす動きが出てくる（同上57）。[33] 戦争はつねに「環境と諸民族の文化的な富」に「深刻な損害」を与えるものである。そして、核兵器や生物兵器を想定すると、その危険はさらに甚大なものになる。それゆえ、「新たな紛争を生じさせかねない原因の発生予防や解決」を目指して、「政治の立場から大いに目を光らせておくこと」が求められると教皇フランシスコは述べる（同上57）。教皇によれば、インテグラル・エコロジーは「暴力や搾取や利己主義の論理」と決別する日常の言動によっても作られている。そして、「消費が肥大する世界」は「あらゆる形

態のいのちを虐待する世界」でもある（同上230）。[35]

『ラウダート・シ』におけるインテグラル・エコロジーと戦争との関係

ここで、『ラウダート・シ』におけるインテグラル・エコロジーと戦争との関係について、筆者の解釈を述べてみたい。まず戦争はインテグラル・エコロジーが実現されていない事態で発生する。すでに述べたとおり、インテグラル・エコロジーは「環境的、経済的、社会的なエコロジー」、「文化的なエコロジー」、「日常生活のエコロジー」から構成されているが、経済発展に伴って消費社会が著しく発達して天然資源が枯渇すると、他の国々に天然資源を求めて戦争が引き起されることがある。そして、人間社会の中で配分的正義が実現されずに貧富の差が広がると、さまざまな暴力が社会の中で起こるようになる。その中で、国家間で、あるいは一国家内の諸勢力の間で戦争が起こると、その戦争はインテグラル・エコロジーを構成する「環境的、経済的、社会的なエコロジー」、「文化的なエコロジー」、「日常生活のエコロジー」をより深いレベルで破壊する。すなわち、戦争は自然環境を破壊し、人間の生命や社会生活を破壊し、人間以外の生命体（動物など）の命を奪い、人間の文化的遺産を破壊し、人々の生活の質を著しく損なう事態をもたらす。そのような破壊行為は、「集団と個々の成員とが、より豊かに、より容易に自己完成を達成できるような社会生活の諸条件の総体」としての共通善をも否定する行為である。人間の創世記を見ても分かるように、人間存在は神との関係、人間同士の関係、他の被造物との関係の中で成立している。そして、これら三つの関係に深い断絶をもたらすのが罪である。このような深い断絶を最高度にもたらすのが戦争なのである。

エコロジカルな教育とエコロジカルな霊性

愛の実践

インテグラル・エコロジーを理解し、実践するために、私たちはどのように生きればよいのか、教皇フランシスコ

は『ラウダート・シ』の中でさまざまな指針を示す。教皇フランシスコによれば、私たち人間は「自分自身から出て他者へと向かうことができる存在」である。自分自身から出て他者へ向かうことができなければ、「それぞれの価値をもつ他の被造物」を認めることができず、他者への配慮もできなくなってしまう（同上 208）[36]。私たちが「自己を超え出るという基本的姿勢」を持ち、閉塞性と自己中心性を超えていくことが、他者と環境への配慮を基本的に可能にする土台である。これからのエコロジカルな教育の中では、「わたしたち自身の中での調和」、「他者との調和」、「自然やいのちある他の被造物たちとの調和」、「神との調和」という種々のレベルでエコロジカルな調和を回復することを目指すべきである（同上 210）[37]。さらに教皇フランシスコはリジューの聖テレジアによる「愛の小さき道」の実践を例に挙げ、インテグラル・エコロジーが「暴力や搾取や利己主義の論理と決別する、日常の飾らない言動」によって支えられていると述べる（同上 230）[38]。

被造物における神の現存――受肉・秘跡・休息

教皇フランシスコは『ラウダート・シ』において、「天地万物は、遍在する神において、真の姿を開示します。それゆえ、ひとひらの葉に、一本の野道に、一滴の露に、貧しいだれかの顔に、神秘的な意味が見いだされうるのです」と述べる（同上 233）[39]。私たちは心の中に神のはたらきをより深く感じるとき、他の被造物において神をより深く認識することができるようになるという（同上 233）[40]。被造物における神の現存について考察する場合、神のロゴスの受肉について考えることが重要である。教皇フランシスコは「キリスト者にとって、物質世界のすべての被造物が自らの本当の意味を見いだすのは、受肉したみことばにおいてです」と述べている。それは神の独り子が人間となって物質界と結ばれて、物質界に「決定的な変化の種」を蒔いたためである（同上 235）[41]。教皇によれば、キリスト教は物質を否定することなく、身体性は典礼行為において、その価値を全面的に認められていて、人間の身体は「聖霊の

神殿」として示され、「世の救いのために肉をお取りになった主イエス」と結ばれているという（同上235）。[42]

教皇フランシスコによれば、教会のもろもろの秘跡は、「神が自然を、超自然的ないのちを仲介するものへと高める、特別に恵まれた手段」である（同上235）。[43] 例えば、洗礼の秘跡の中で子どもの体に注がれる水は、「新しいいのちのしるし」である（同上235）。[44] そして、聖体の秘跡においては、創造されたすべてのものが最も高められる。私たち人間が感覚でとらえられるような仕方で、神が自己自身を顕す恵みは、神自身が人となり、被造物のために自分自身を食べ物として与えたとき、この上ないかたちで表現された。神は「受肉の神秘の頂点において、ひとかけらの物質を通じて、わたしたちの内奥にまで達すること」を望んだと教皇フランシスコは述べる（同上236）。[45] そして、聖体において宇宙におけるすべての被造物との関係が開かれる。教皇フランシスコによれば、受肉した御子の現存する聖体は「万物のいのちの源」、「愛とくみ尽くすことのできないいのちとがあふれ出る泉」である。全宇宙は聖体の中に現存する受肉した御子に結ばれて神に感謝をささげると教皇は述べる（同上236）。[46] そして、聖体は天と地を結び、被造界全体を抱いて貫くものとなる。聖体において被造界は神化、神との一致へ向かうように秩序付けられている。さらに聖体は私たち人間を「被造界全体の信託管理人」であるように導き、「環境への関心を照らし生かす光と力の源」でもある（同上236）。[47]

教皇フランシスコによれば、主日（日曜日）は私たち人間が神との関わり、自分自身との関わり、他者との関わり、世界との関わりを修復する日である。そして、「主日」は「復活の日」、「新しい創造の『第一の日』」であり、「主の復活した人間性、全被造物の最終決定的な変容の確約」である。そして、主日は「『神のもとにおける人間の永遠の休息』を告げる日」でもある（同上237）。[48] このように、キリスト教の霊性においては、休息と祝祭の価値が統合される。もしも、私たちが観想的な休息を軽視するならば、

我々の為す仕事にとって最も大切なもの、すなわち「働くことの意味」を考慮しないことへとつながる。休息は私たちがより広い視野を持つことができるよう、私たちの目を開かせるものであり、他者の権利に改めて気づかせてくれるものである。そのため、「感謝の祭儀を中心に置く休息の日」は、「週全体を照らし、また自然や貧しい人々のことをいっそう心にかけるよう」、私たちを促すものである（同上237）[49]。

被造物の間にある関係と三位一体

教皇フランシスコは神の三位一体と被造物との関係について以下のように考えている。御父は「あらゆるものの究極の源泉」であり、すべての存在にとって「愛と親密さの基盤」である（同上238）[50]。御父は御子を通して万物を創造し、御子がマリアの胎に宿ったとき、自己自身をこの大地と固く結んだ。聖霊は御父と御子の交わりの愛そのものであり、この世界の中の天地万物の内にも働いて現存している（同上238）[51]。神の三位一体における父と子と聖霊という三つのペルソナが唯一の神の本質において共に働きながら、この世界を創造した。三つのペルソナはこの共同の御業を、各々固有の仕方で行った（同上238）[52]。

教皇フランシスコによれば、すべての被造物が「三位一体的な痕跡」を自らの内にとどめている。すなわち、どのような被造物も「三位一体的な構造」を内包している（同上239）[53]。神の三位一体において、父・子・聖霊の個々のペルソナは「自存する関係」である。そして、「神をモデルにして創造された世界」は「かかわりからなる織物」である。被造物は「神へと向かうもの」であり、それゆえ、あらゆる生き物は「他のものへと向かう性質」を備えている。そこから、「被造物の間に存在する多様なつながり」を認識する。

人間の人格は、神との交わり、他者との交わり、すべての被造物との交わりを生きるために、自分自身から出て、もろもろの交わりに参与すればするほど、一層成熟し、聖化される（同上240）[54]。そして、すべての被造物は創造の

際に神が刻印した「三位一体的なダイナミズム」を自分のものとする。すべてのものは関係しあっており、それが「三位一体の神秘」にもとづいた「地球規模の連帯の霊性」を育むよう私たちを促している（同上 240）[25]。

結語

本稿の主題は、教皇フランシスコの回勅『ラウダート・シ』におけるインテグラル・エコロジーと戦争との関係について解明することであった。本論の内容をまとめて結論を述べたいと思う。インテグラル・エコロジーは「環境的、経済的、社会的なエコロジー」、「文化的なエコロジー」、「日常生活のエコロジー」という要素から構成されている。戦争はインテグラル・エコロジーが実現されていない状況の中で発生し、さらに戦争はインテグラル・エコロジーを構成する上記の諸要素をより深いレベルで、すべて否定し破壊する機能を持っている。人間存在は神との関係、人間同士の関係、他の被造物との関係の中で成立している。これらの関係を断絶するのが罪である。そして、戦争は神との関係、人間同士の関係、他の被造物との関係を最高度に断絶する性格を持つ。

インテグラル・エコロジーを実現して、利己主義に基づく暴力や搾取から決別するためには、私たち一人ひとりが自分自身から出て他者へと向かうことが必要である。自分自身から出て他者へ向かうことによって、他の被造物を認めて他者への配慮ができるようになる。私たちが自己自身を超え出るという基本的姿勢を持ち、自己閉塞性と自己中心性を否定することが、他者と環境への配慮を基本的に可能にする土台となる。それによって、神との関係における調和、人間同士の関係における調和、他の被造物との関係における調和を回復することができる。

さらに教皇フランシスコは、すべての被造物が三位一体の構造を内包していて、神の三位一体の個々のペルソナが自存する関係であるように、三位一体の痕跡を持つ一つひとつの被造物も、神へと向かい、他のものへとの向かう

性質を持っていると考える。私たちが他の被造物における三位一体の構造を見出すとき、すべての被造物の間に存在する多様な関係を認識する。そして、私たち人間の人格は、神との交わり、他者との交わり、すべての被造物との交わりを生きるために、自分自身から出て、もろもろの交わりに参与すればするほど、一層成熟して聖化される。これがインテグラル・エコロジーを実現するための基盤となっている。

つのだ・ゆういち
上智大学助教

参考文献

教皇フランシスコ『回勅　ラウダート・シ――ともに暮らす家を大切に』、瀬本正之・吉川まみ訳、カトリック中央協議会、二〇一六年。
角田佑一「教皇フランシスコ『ラウダート・シ』における三位一体の神秘――いのちの交わりとエコロジー」、片山はるひ・原敬子編著『「いのち」の力――教皇フランシスコのメッセージ』、キリスト新聞社、二〇二一年、一六二～一八四頁。

註

① 教皇フランシスコ『回勅　ラウダート・シ――ともに暮らす家を大切に』、瀬本正之・吉川まみ訳、カトリック中央協議会、二〇一六年、一二三頁。本文中、『ラウダート・シ』からの引用文には、『ラウダート・シ』の項番号を引用文末尾のカッコ内にアラビア数字で記載している。そして、尾注では、『ラウダート・シ』の日本語訳（教皇フランシスコ『回勅　ラウダート・シ――ともに暮らす家を大切に』、瀬本正之・吉川まみ訳、カトリック中央協議会、二〇一六年）の頁番号を漢数字で記載している。
② 同上、一二三頁。
③ 同上、一二四頁。
④ 同上、一二四頁。
⑤ 同上、一二四頁。
⑥ 同上、一二四～一二五頁。
⑦ 同上、一二五頁。

⑧ 同上、一二五頁。
⑨ 同上、一二八頁。
⑩ 同上、一二八頁。
⑪ 同上、一二八 頁。
⑫ 同上、一二九頁。
⑬ 同上、一二九頁。
⑭ 同上、一二九頁。
⑮ 同上、一三〇頁。
⑯ 同上、一三四頁。
⑰ 同上、一三二頁。
⑱ 同上、一三七頁。
⑲ 同上、一三八頁。
⑳ 同上、一三八頁。
㉑ 同上、一三八頁。
㉒ 同上、一三八頁。
㉓ 同上、一四〇頁。
㉔ 同上、一四一頁。
㉕ 同上、一四一頁。
㉖ 同上、一六～一七頁。
㉗ 同上、六一頁。
㉘ 同上、六一 頁。
㉙ 同上、八四頁。
㉚ 同上、八四 頁。
㉛ 同上、九四～九五頁。
㉜ 同上、九五頁。
㉝ 同上、五三頁。
㉞ 同上、五三 頁。
㉟ 同上、一九四頁。
㊱ 同上、一七七頁。
㊲ 同上、一七九頁。
㊳ 同上、一九四頁。
㊴ 同上、一九六～一九七頁。
㊵ 同上、一九七頁。
㊶ 同上、一九八～一九九頁。
㊷ 同上、一九九頁。
㊸ 同上、一九八頁。
㊹ 同上、一九八頁。
㊺ 同上、一九九頁。

㊻ 同上、一九九頁。
㊼ 同上、二〇〇頁。
㊽ 同上、二〇〇頁。
㊾ 同上、二〇一頁。
㊿ 同上、二〇一～二〇二頁。
51 同上、二〇二頁。
52 同上、二〇二頁。
53 同上、二〇二頁。
54 同上、二〇三頁。
55 同上、二〇三頁。